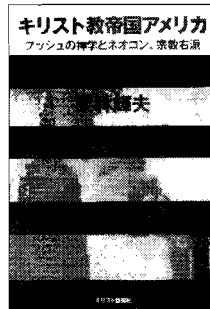


キリスト教帝国アメリカ  
ブッシュの神学とネオコン、宗教右派

栗林 輝夫 著



言葉の本来の意味で、「きわもの」である。つまり、キリスト教の視点からアメリカ政治の表と裏を捉え、その「今」を切り取った、優れた時事研究である。現在進行形の書き物は、終わりようがない。だから結論はどうしても「成り行きが注目される」になってしまう。新米記者のいわゆる「成り注」原稿である。だが本書は、ベテランのトレンド・ウォッチャーが、それもこれもみなわきまえた上で、おそらく胸を張って「きわもの」であることを自認する書物である。

筆者は9・11事件からイラク戦争直前までの一年半をカリフォルニアに研究のために滞在しており、アメリカの世論が急速に戦争へと傾斜してゆくさまを目撃している。その経験が、本書を含むさまざまな「ブッシュとキリスト教」関連の執筆に直接の動機を与えている。たまたま評者もほぼ同じ時期を米国東

現在進行形の優れた時事研究  
豊富な資料の情報源はインターネット

部に過ごしたので、著者の気持ちにはよく分かる。

読者はまず、駆使されている資料の豊富さに圧倒されるであろう。実によく読んでおり、よく集めてあり、よくまとめてある。いくつもあるブッシュやスピーチライターら周辺人物の伝記、関連する新聞や雑誌の記事。それもメジャー紙ばかりでなく地方紙に載った記事まで拾っている。

著者も認めるとおり、その情報源はインターネットである。引用されたものは、ほとんどが今でもネット上で入手できる。巻末に親切的な情報源の紹介もあるため、資料をたどる必要のある人には、とても重宝な本であるろう。

内容をかいつまんで紹介しておく。第一章は、いかにしてブッシュが(今渦中の人となった)カール・ロープら選挙参謀の知恵を借りて大統領に当選したかを検証する。第二章は、就任間もなく人気が低迷していたブッシュが、9・11を境に、戦時大統領としてもっとも人気の高い指導者へと変貌した経過をたどる。第三章は、対テロ戦争へとアメリカ世論を駆り立てる「善と悪」「光と闇」の二元論を論じ、第四章は、ネオコンと宗教右翼という国内勢力がいかにイストラエルとイラク戦争というアメリカの重要な外交戦略を左右したかを示す。第五章は、ブッシュや側近らの宗教意識について、そして第六章は、再選に際して、民主党候補のケリーがいかにカトリック票を取り込むうとしたか、そしてブッシュ陣営がいかに宗教右翼や福音派を動員したか、を跡づけている。最後の数頁では、今年1月の一般教書演説で「自由」という言葉が49回用いられたことなど、日本の新聞でもしばしば報じられ

評・森本 あんり (国際基督教大教授)

たぐく最近のニュースにまで触れられている。

『シネマで読む新約聖書』という著作もある著者らしく、随所に映画の評が挟み込まれており、アメリカの一般的な国民がどのような文化環境に暮らしているかを、分かりやすく教えてくれる。『レフトビハイソンド』に登場する、国連で弁舌さわやかに平和を説く美青年が、実は反キリストだった、などという話もできすぎていて面白い。

ただ、情報は溢れるばかりに多いが、分析は借りの物で、結論はお決まりである。読んで新しい発見がある、というわけではなく、読者は初めから抱いていた印象をそのまま再確認することになろう。われわれは、本書を読んで今のアメリカにほとんど呆れかえった後、いったいどうしたらよいのだろうか。

まあ、それにしても、キリスト教的な背景を理解した「憂慮する日本人」が増えるのは、いいことには違いない。

(キリスト新聞社・四六判・304頁・2520円)

読書  
【どくしょよ】

